

ラ
アイ

青木 誠の おんがく探偵談 ⑤

今年の夏は、日本再発見、フェスティバルが、全国で旗揚げしたようだ。

七〇年代の夏は、ジャズ・フェスティバルが各地を賑わした。高原やら、野球場やらにステージを組み上げて、昔ながら盆踊りか歌謡ショーをやるころを、元氣いいジャズを鳴らしたのだ。いずこも「祭り」の復活を叫んだが、どだいジャズ界にその意識は希薄だから、近年は急激に色あせている。かわりに、一部ではロック・フェスティバルもみられる。これだって、似たりよったり。

今年も、会場はおなじような場所を設定している。千葉県の「原楽ルネッサンス」はテント村、八王子の「祭り」は公園と市営グラウンドを使っていた。問題は出演者で、沖縄県の喜納昌吉、北海道の伊藤多喜雄たちが、ジャズにかわっているのだ。喜納昌吉は、この夏、反核コンサート

民族の音楽、再興の芽が…

今夏の「音楽祭り」



グラウンドを踊りの渦にした、八王子の「音楽と生活と遊びの祭典」

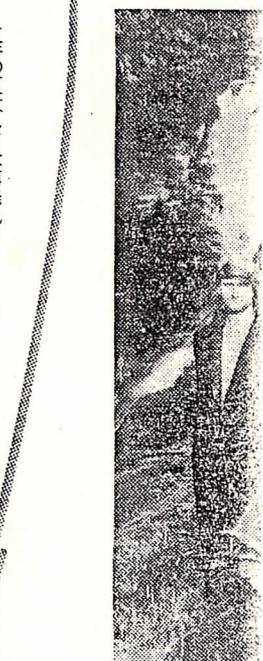
で日本縦断している。それと、和太鼓集団の鼓童の動きがある。こちらは地元、佐渡で、八月十五日から二十二日まで一週間、世界のパーカッティンを中心とした手造りフェスティバルで、運動場のトラックに、ステージを設営している。すばらしいのは出演者だ。サムルノリ、伊藤多喜雄、喜納昌吉と、韓国、北海道、沖縄の三エスニック・バンドの競演である。

伊藤多喜雄は民謡歌手で、バンドも三味線、尺八、和太鼓。これがとぎとぎとして、ロックのノリで暴れたときがある。淡さはあるが、陰は、後半は客が立ち上がったて踊りだした。

喜納昌吉は八年ぶりの本土上陸になる。女性コーラスをまじえた九人編成のバンドは、レゲエに似た気軽なノリがあつて、グラウンドを踊りの渦にした。真夏の炎天下、正午から五時まで、うれしい祭りとなった。

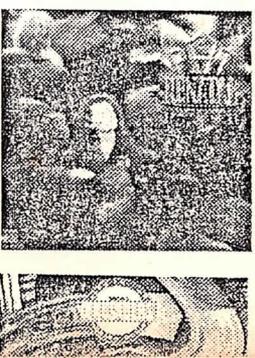
ジャズやロックが、若い世代に与えた影響は、世界各国共通である。しかし、ようやく、そこで鍛えられた経験を生かして、もう一度民族の音楽を再興しようという芽が、でてきたように思える。八〇年代後半の若者が、それを支持しはじめたようにみえた。

(音楽評論家)



り自分自身や自分の近くにいたい。人たちのことを歌いたい。に思っているし、その気持テーマにこだわるよりも、人は口に出さなくても、みんなに伝わっている。一人の人に伝わっているはずだ」と間を、深く掘り下げて歌ってイアクナ。

ヨロロッパで大成功を取った後、ホットハウス・フーズは十月に初めてアメリカに進出する。U2が何年かかって果たしたアメリカ制を、彼らは意外と早い時期にやっつけてのけるかもしれない。



「バット・ベネターノワイ「クルセード・アウェイク・イン・ドリムランド」(東宝EMI)」「ロック・ボーカリスト、バット・ベネターノが三年ぶりに発表した九作目のアルバム。八〇年から続けて、四年連続してグラミー賞ロック部門を獲得している実力は、ロッキン・ザ・バンドのフェルダのさえ、リリックが、母親となつてから心地良い。今回の作品には賞録が備わっている、ハードに押し切っていた部分が多くなった分、多様な切り口をのぞかせている。心身ともに充実したバットの来日公演が期待される一枚だ。待を真切ら